第 19 期京都教師塾　塾生通信

学びの広場

京都市教育委員会
教員養成支援室
令和６年12月７日　No.5

第４回の教育学講座では、京都市の教育現場で長年、児童生徒と向き合ってこられた専門主事・指導主事の先生方から、児童生徒理解を深めるための実践についてお話いただきました。『自分自身が他者から認められ居場所がある、居心地がいい、活躍できる場がある、自己実現ができる、授業が分かる、学ぶことが楽しい』という学校生活の根底には、全て教師の深い児童生徒理解があることが、主事の先生方のお話から伝わってきました。

仲間のレポートに学ぶ

第４回京都市教育学講座　中学校専門講座
中学校における教師の実践　～生徒理解を深めるために～　を受講して

パネルディスカッションを通して、「押し引き」という言葉が印象に残った。この言葉は、生徒との関わり方において重要なバランスを示していると感じた。これまで私は、生徒理解のためには積極的にコミュニケーションをとることが重要だということだけを考えていた。しかし、実際にはその逆に、あえて距離を置いて関わることが生徒の成長を促す場面もあることを学んだ。コミュニケーションの取り方は一方向ではなく、押し引きのバランスが大切だと実感したため、日常での友達との関わりなどでも心掛けてみたい。

さらに、押し引きと似た話として、分散会の時に担当の先生から「生徒に寄り添うとはどのようなことですか。」と問われたことも印象に残っている。「寄り添う」という言葉を簡単に使ってきていたが、寄り添う方法には様々な形があり、近くで支えるだけではないということを考えるきっかけになった。例えば、隣にいるだけではなく、後ろから見守ることや、場合によっては少し距離を置いて見守ることも生徒にとっては寄り添い方の一つだと気づかされた。私は養護教諭を目指しているため、今後、心身に関する悩みを抱える生徒たちと関わる機会が多くなると思う。そうした場面で生徒に合った寄り添い方をするためには、まずはその生徒が何を求めているのかを理解することが重要だと考える。近くで手を差し伸べることが求められる場合もあれば、少し距離を取ることで生徒が自分の力で解決しようとする時期があるかもしれない。それぞれの状況に応じて、どの距離感が最適かを見極めることが、養護教諭としての大切なスキルだと思った。また、今回の講座では「生徒観」という概念に初めて触れることができた。グループワークで生徒観を書いた経験を話してくれた人がいて、私が普段書いている看護記録に似ていると感じた。しかし、看護記録は患者ごとに個別の記録を作成するのに対し、学習指導案などで生徒観を書く際には、個々の生徒に対する理解と共に、集団としての視点を持つことが求められる。そのため、クラス全体を意識して生徒観を捉えることは、個々に合わせたアプローチとは異なる難しさを持つと感じた。

それでも、生徒一人一人を理解し、どのような方法で学びをサポートできるかを考えることが、教育者としての成長に繋がるのだと思う。今後、生徒観や寄り添い方についても、理論だけではなく実際に現場で経験を積みながら深めていきたいと感じた。

あえて距離をおくことで、生徒が自分の力で解決しようとする時期があるかもしれないと考えたところに学びの深まりを感じます。「その生徒が何を求めているのかを理解すること」は一人一人を徹底的に大切にすることにも、子どもの背景を理解することにもつながります。生徒が求めていることは、直接のコミュニケーションからだけではなく、担任の先生や学年の先生、部活動の先生などの情報からもみえてくることがあります。そんな情報が集まるのが保健室でもあり、知り得た情報を発信するのも養護教諭の大切な仕事です。看護記録の経験を、集団としての視点へと広げる生徒観にも生かせるよう、これからの現場での経験の積み重ねによる学びを応援しています。

～クラス担当スタッフからのコメント～

仲間のレポートに学ぶ

第４回京都市教育学講座　小学校専門講座
小学校における教師の実践　～児童理解を深めるために～　を受講して

今回の講義を聞いて、児童と関わり続ける根気強さが教師として大切だと学んだ。ダメなことはダメだと指導しきることが必要だが、怒りっぱなしにするのではなく、あなたを大切にしていることをしっかりと伝え、その後児童が変わろうとする姿を見逃さないことが大切である。そしてこのような児童が変わろうとしている姿を見つけたらそれを本人に伝えるだけでなく、クラス全体に伝えることが学校としての役割であると考えた。学校という集団でしかできない教育を提供するためには、児童と教師という一対一で終わらせるのではなく、児童の成長がより良い学級につながることを意識しなければいけない。インターンでお世話になっている小学校では、教室内にポストを設置し、児童同士や教師から児童に向けてクラスの中で見つけた良い所や感謝を共有しようという取り組みが行われている。些細な行動であっても誰かが見てくれていると感じることで児童の自信につながったり、友達の良い所を見つけることで自分自身の成長にもつながったりと、様々な利点を感じている。児童を見て知るだけでなく、その中で見つけた様々な児童の姿を学級全体に返していくことで、学校でしかできない児童の成長を促すことができるよう様々な工夫を凝らしていきたいと考えた。

分散会では、学級内のすべての児童を見て関わるためにはどうすれば良いかを話し合った。児童の中には、自分から何かしらの方法で教師側に様々なアプローチをしてくれる児童もいれば、自分から積極的にアプローチをするのが苦手な児童もいる。また、教師も教室内で目立つ行動をとる児童に目が行きがちでありすべての児童を見るというのは簡単ではない。そこでグループで様々な意見を出し合い、座席表に児童の様子を書き込んでいくことで見られていない児童に気づけるなどの意見が出た。目立った行動をとる児童の本当の声を聞くことを大切にしながらも、その児童以外の様子もよく見て関わろうとすることは必要なことであると感じた。

児童一人ひとりと関わり、児童のことを知り続けるとともに、教師と児童の一対一ではなく、学校という集団での教育であることを意識して学級全体に返すことができる教育を考え続けられる教師になりたいと考えた。

自分の思いや感情を様々な形で子どもは出してきます。一人一人をまず大切にしたいですね。「私の先生は、どの人も大切にしてくれる。私も大切にしてくれる。」と思ってくれれば、先生が他の子どもに向き合っている時間があっても待つことができ、その子への理解も深まります。子どもは、友達との関わりの中で成長していきます。学校・クラスという集団の中でこそ経験できることがあり、学ぶことがあります。「良いところ見つけ」のような学級での取り組みや行事は、学校だからこそできることです。取り組みの意義をしっかりともち、一人一人を見つめながら、個々の力とクラス全体を高めていってください。

～クラス担当スタッフからのコメント～

分散会の様子

今回の分散会では、進行役を設定せずにグループ協議を行いました。グループ協議の全体像を捉え、内容に応じて話すタイミングを考えたり、話の内容を深めるための問いを投げかけたりすることを、１人１人が意識しながら話し合いを進めることができました。

次回は、
京都市教育学講座⑥『教師に求められる資質・能力とは　～自己理解を深め、目標を明らかにする～』

実際に塾生の皆さんが教師役や児童生徒役になるロールプレイングを通して、自らの人間関係力を俯瞰的に捉え、自身の人間関係力における強みや弱みについて考えていきます。自己の理解を深める中で、教師をめざすにあたり、自身のよさを伸ばし、課題を克服していくために、今何をしていったらよいのか考えるきっかけになればと思います。

子どもたちの今と未来のため、社会のあらゆる場で「子どもを共に育む京都市民憲章」を実践しましょう！
京都はぐくみ憲章